長崎大学教養部紀要（人文科学篇）第23巻　第2号　1－28（1983年1月）

艾蕪覚え書 Ⅳ

中田喜勝

A Note on "Ai Wu" (Ⅳ)

Yoshikatsu NAKATA

まえがき

今年、7月29日、上海に到着すると、"教科書問題"について、盛んに情宣活動が展開されていた。"中央人民広播電台"は約一週間、連日、文部省批判の放送をした。中国側としては、当然のことと思われる。

抗日戦争の時期に、中国の作家はどのようにしていたのであろうか。

そこで、艾蕪先生について、以下の項目について述べることにする。最後に桂林時代に書かれた"意外"と題する短篇小説を訳出してみた。国民党の軍隊の募兵方法についても触れているからである。

1 上海事変以後の足跡
2 成都を目指して
3 艾蕪先生との単独インタビュー

1 上海事変以後の艾蕪

四川大学学報叢刊第十二輯（1981・11）が"四川作家研究"の専輯をしていて、その中に詳細な「艾蕪年譜」（1904～1949・9）が載っている。これに基づいて「上海事変」後の艾蕪の足跡を追求してみる。

1932年（民21・昭7）　28歳

1月　日本帝国主義が上海を侵犯し、所謂"1・28事変"勃発す。

8月1日　王蕾嘉と結婚。彼女の本名は王顕葵、湖南省寧遠の人。中国詩歌会会員。

1934年（民23・昭9）　30歳

12月　国民党反動派の迫害を避けて、王蕾嘉と共に上海を離れ南京へ、更に山東省の済南・青島へ行く。

1935年（民24・昭10）　31歳

10月　青島から上海へ帰る。

1937年（民26・昭12）　33歳

10月　日本軍が進攻して来たので、上海を離れて嘉興へ行く。

11月　嘉興から蘇州・鎮江へ行き、船で武漢に到着す。

12月中旬　武漢から長沙へ行く。

1938年（民27・昭13）　34歳

1月　長沙から寧遠へ行き、妻の実家に住む。

2月　寧遠県城に転居し、寧遠女学校で半年、教師をし、妻も寧遠の楽群中学で教鞭を執る。

1939年（民28・昭14）　35歳

春　広西省の桂林へ行き、作家の林林の援助で《救亡日報》社の市内にある宿舎に住む。後、施家園に転居。この年、長子湯継沢出生。

1940年（民29・昭15）　36歳

桂林郊外の観音山に転居し、竹造りの簡素な家屋に住む。

1944年（民33・昭19）　40歳

夏　日本軍が衡陽を占領する前夜、桂林は大疎開が行なわれ、一家六名（妻王蕾嘉・長男湯継沢・長女湯珍妮・次女湯継玳・三女湯継珊）で避難。桂林から汽車で柳州へ行き、四十日余り逗留。後、遵義経由で重慶に到着。時は中秋の頃。重慶到着後、一家は“抗敵協会”の会議室に住み、一ヶ月後、南温泉の劉定明の茅屋に転居。市内から二十五粁のところに在った。

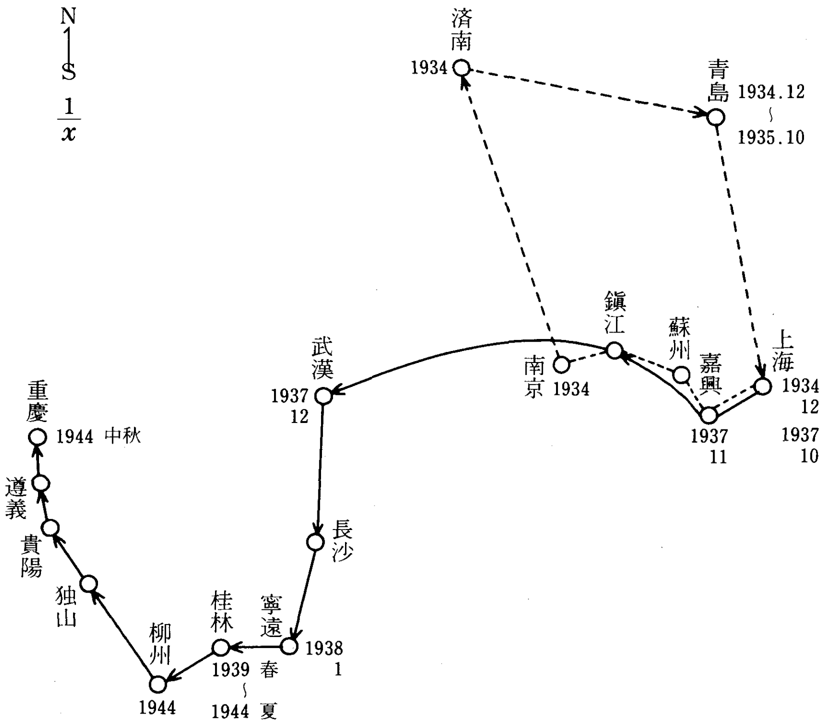
1945年（民34・昭20）　41歳

依然として重慶の南温泉の田舎に住む。

以上の記事から艾蕪の足跡を要図にしてみると次頁のような図となる。

点線は1934年12月から1935年10月までの路程を、黒線は1937年10月から1944年秋までのをそれぞれ示している。前者は国民党の重圧から、後者は日本軍の“侵略”から逃れるためであった。

艾蕪足跡要図



戦後、艾蕪は重慶から鞍山・北京での時代を経て、1965年に成都に落着き、現在（1982・8）妻と次男夫婦と共に起居している。なお家族について触れておく。

長女：珍妮　1966年逝去

次女：継玳　1942年桂林にて出生。四川医学院卒業後、現在成都第三医院で医師をしている。

三女：継珊　1943年桂林にて出生。

長男：継沢　1939年桂林にて出生。天津大学卒業。専攻は計器。現在、重慶計器工場で仕事をしている。

次男：継湘　1948年重慶にて出生。現在、成都少年児童出版社編輯部に勤務

しながら、四川大学の中文系新聞学の研究生でもある。妻は王沙、《文譚》編輯部勤務。

艾蕪にとって、五年近い桂林での生活は比較的、精神的には安定していた時期だと考えられる。

しかし、国民党の重圧と日本軍閥の“侵略”が艾蕪の物心両面に莫大な被害を与えている事実を看過ごすことはできない。そこでこの事実を少しでも認識するために、関係資料を挙げることにする。資料は次の通りである。それぞれ訳出してみた。

① 作家生活自述（“当代文芸”1巻4期 1944・4）

② “故郷”校后題記（“文滙報”1947年3月28日）

③ 艾蕪の生活の道程・創作の道
及び芸術的風格（浙江《東南日報》“筆塵”新570期。1947年前後、筆者は風砂）

④ “艾蕪中篇小説集”の序言（1958年5月）

① 日本ファシストの強盗が我々を6・7年間攻撃したが、私は安全な後方に静かに引続き住んでいた。この点は非常に恥ぢている。自分たちの生活が快適でないことを平気で怨みがましくは誰も思えないのだ。

戦闘地区の男女同胞は敵砲火の下で、焼かれて帰るに家なく、又は惨殺されたり、強姦されたりした者もいる。前線の兵士の兄弟たちは必死で戦い、一日中、何時も飯が食えないでいるのだ。自分の生活が不幸だと、どの面下げて訴えられようか。

ところが、先頃、桂林の某新聞紙上に桂林の作家たちの文章が紹介されていたが、某作家は私が生活苦から筆を捨てて転職をするつもりでいると書いていた。私は非常に腹が立った。私は転職の話を人に言ったことは断じてなく、その作家が私を訪ねて来たこともない。

各地に散らばっている友人や、会ったこともない読者が事実に反するこの記事のせいで、手紙を寄せ、私を慰めてくれた。借金の必要はないのかと尋ねてくれた人もいたし、ある人はこんなことも知らせてくれた。それは敵の日本や汪精衛のグループがそのでっちあげの訪問記を翻訳、転載し、馬鹿げた

作り話まで加えて、文芸者の抗戦意識がいかに低下しているかを宣伝する道具に仕立てたというのであった。

私は沈黙しているべきではないので、大声で広く世に知らせねばと感じた。私個人の生活は幸せである。第一、前線で戦っている兵士が敵を足止めにしているので、私は後方で無事に暮らせるし、空襲を除けば、日本のファシスト的強盗の虐殺、蹂躙を受けることはない。第二に、私はこのペンをせっせと動かしているお蔭で、某作家が言うように米代を毎日、人から借りるような状態には立至ってはいないし、仕事を通じて暮らすことができている。大商人に比べればすべて意の如くというわけではないが、戦地で敵と必死で戦っている人や敵からひどい目に遭っている人と比べると、何倍もましである。

元来、私は文芸の仕事に従事していて、これが金持ちになる道ではないことはとっくに分かっていたし、生活のための職業とすることにも不安を持っていた。どんなことをしてでも、例えば教師・商人・労働者でもよいし、百姓をしてでもよいから、時間を割いて書きものをし、文芸を愛する情熱を満足させようと心に決めている。こういうわけだから、私は何も職を変える必要がない。同時に、後方にいても恥ぢる気持が少なくなってもよいのではないかと思っている。つまり、文芸作品を書くことによって、抗戦・殺敵という大きな海の中で、僅かながらも一滴の微力を尽くし、たとえ作品が前線を直接描写していなくても、後方の目立たぬ兄弟を書く場合には、読者が彼らへ強烈な同胞愛を持つようにし向けたいのだ。なぜなら、同胞愛が無ければ、同胞が敵から殺されていることに対して、最大の“仇恨の心”を持つことができないからだと考えている。

② 日本の帝国主義者が長沙をすでに攻略し、衡陽に迫ったので、桂林は大恐慌に陥り、省政府の一部は宜山に避難し、各機関もまた次々に疎開した。商店の貨物や人々の荷物がごった返し、山積みされて、波止場や駅の方へどんどん流れて行った。当時、私は四部の原稿とその他の原稿を書籍や衣裳箱と一緒にして鉄道便で送るために切符を買い、桂林北駅の山のように積まれた貨物の中に置いていた。それは私自身の一つの運命ともなったのであった。あの時は妻の蕾嘉や大きい方の八歳未満の子ども二人や、まだ歩けない子ども二人の面倒をみてやるのがやっとであった。幸いにも、柳州へ逃げのびて、荷物も受け取った。柳州に四十日あまり滞在したが、敵兵は衡陽に釘づけにされていたので、桂林の恐慌が解除された。しかし、子どもが小さすぎたので、

皆に跟いて桂林へ帰ることはしなかった。衡陽が陥落してからは、原稿や荷物を持ち、そして子どもを連れて、黔桂路に沿い、重慶へと逃げて来た。

《故郷》を出版する書店は避難が後れたので、避難中に第二部・第三部の紙版を紛失してしまい、第一部の紙版だけは持出しはしたが、書店自体が倒産してしまった。子どもの安全を思ったために、私の“故郷”の原稿が保存されたことを喜ばないわけにはいかない。

私は重慶の温泉が出る田舎で、また“故郷”の第五・第六の原稿二部を書き続けた。遂に1945年8月に無事、書き終ったのである。

この“故郷”を書いた長い長い五年間は、私が気力旺盛だったとしても、私一人が困難を克服し、頑張って書き続けられたのでは決してない。私の妻の蕾嘉のお蔭である。彼女は何時も傍で私を励まし、一段を書き終ると、さっと持去って読み、私を鼓舞してくれた。書き写しの仕事や誤字の訂正を手伝ってくれた時もあった。

③　この寒い風とひどい雨の中を貴男は子どもを連れ、古びた幾冊かの書物——貴男にとっては貴重品で、携帯するのを忘れるはずはない——を持って何処へ行こうとしておられるのか。貴男は頑強なお方だが、霧の多い黔桂路を急ぎ行かれるには、やはりご注意なさるがよいでしょう。“六人の家族と共に柳州へ移った”という貴男についてのニュースを読んだその日から、私の心は限り無い憂いに沈んでいるのです。気心のよいある人が中央社電のニュースを見せてくれたあの日のことを憶えています。電報は柳を歐の字に間違っていました。疑惑の雲が鉛のように重たく私の心を覆いました。すでに柳州方面へ貴男は今移ったのだと私は断定しましたが、一日おいた新聞がこの推測が正しかったことを証明してくれました。それで、貴男のことを思う気持が日の経つにつれて強くなったのです。

毎日、郵便配達夫が届ける手紙に期待していました。しかし、彼は興奮と慰安とを私に存分与えてはくれましたが、彼が立去るのを見ていると腹立たしさと怒りとを抑えることができませんでした。

今日、新聞を偶然ひらいて看ると、桂林通信に貴男についての記事があるのが目につきました。貴男がなお柳州に足留めされており、しかも友人から軽蔑され、赤貧の生活にさらされていると伝えていました。子どもが貴男の服の端を引張って“父ちゃん、腹空いた”と叫んでいるとも書いてありました。この言葉に私の心は刀で斬られたようになりました。貴男の顔は生きる

ためには悲しい表情をしたことがないのに、子どものためには苦痛の色が加わったように私には思えました。貴男は生活の底辺から鍛え抜かれた方ですから、飢えということは若い頃にすでに充分、味わったことでしょう。貴男は十歳代から雲南、ビルマの辺境を放浪し、人生で最も苦がい一杯の水を飲みました。今、貴男の子ども、珍々やその弟のためにも、貴男はあのような苦しみを味あわせたくないことでしょう。極端に窮迫した生活をなさっていないならば、子どもさんたちがそんな悲しげな叫び声を出さないのではと思ったりしています。私は信じています、あの苦難の時代に生きたことを貴男自身は決して怨んではいないが、社会のいろいろな不公平な現象に直面して、激しく憤慨されることも多いだろうと。……

④ 私の子どもは今もう十七・八歳になった者もいるし、二十歳になった者もいる。祖国が解放された時には、彼らは十歳前後に過ぎなかったが、それまでに父母の過ごした長い期間に、彼らは苦しい体験をしたことがある。母親は当時一番小さい弟や妹を連れて洗濯をし、父親は文章を書いたり、人に読書を教える外に、炊事の仕事を手がけた。今でも憶えているが、重慶の張家花園85番地のあの小さな鋭角三角形の台所で毎日、粗炭を燃やしたが、それは実に決して容易な仕事ではなかった。造りつけの“かまと”で、煙の出る通気孔がないので、火をつけると台所中が煙で一杯になり、しばらく飛散しなかった。そしてみなはその中に立って、ひっきりなしに団扇で扇いだが、呼吸が苦しくて咳きこみ、両眼から涙が流れ、眼を開けることもできないほどひどいものであった。大きい女の子と大きい方の男の子が私の手から団扇を受取って、次々に煙を冒かして爐の方へかいくぐって行き、さっと扇いでは、眼を閉ぢ咳きこみながらとび出て来、一休みすると又、中に駈け入り、火が完全に燃えつくまでずっとそうしたのだった。一方では可愛いと思うものの、不憫だと思った。彼らはみな幼なく、体に有害な仕事はまだしてはいけないからである。

日本帝国主義が湘桂地方に侵攻し、占領した時、私たちは四人の子どもを連れて、桂林から重慶へと逃げ、道中にはつまづき、うろたえながら放浪した三ヶ月があった。二人の幼い女の子は歩けないので、その都度、私たちが抱きかかえていた。歩ける女の子と男の子とは荷物の番をしたり、小さな包みを提げたりして歩いた。子どもは腫物が出来たり、罹病した者もいたが、長い間、治療が受けられなかった。このようなことを思い出すと私の心は悲し

くなる。今では彼らはあのようなことをもうあまり記憶していない。苦しかった生活や、慌てて逃げまわった様子も憶えてはいないし、昔よりも楽しく暮らしているかも知れない。しかし、解放前の生活が今のようにずっとよかったと思うのならば、それこそ間違っているのだ。

[2] 成都（聖都）を目指して

8月9日、上海発12時44分の汽車（52便）は、隴海線を西へ西へと1511粁、翌日の昼過ぎには西安に無事到着。西安に二泊し、成都へ更に842粁、全行程2353粁の独り旅を続けた。西安からは硬臥車（普通寝台車、ベッド三段）に乗り換えることにした。中国の愛する大衆と親しく話せるからでもある。

12日、列車（237便）は西安を14時10分に発車し、宝鶏駅起点の宝成線を南下していた。一望千里の“玉米（とうもろこし）”畑は姿を消して、高い山が多くなり、トンネルが続く。この秦嶺山脈を越えると四川の盆地、その中心の成都には艾蕪先生が居られる。西安から先生宛打電もしたし、二年来の宿願が達成されようとしていた。聖地巡礼にも似た旅であった。

その日の18時、秦嶺という駅にしばらく停車した。外の冷気が車内にまで入って来る。深い谷を隔てて、鋭角三角形の連山、樹林は無い。淡紅の夕陽はすでに山の端に近く、日没の近いことを告げていた。周辺には人家も無く、山峡の閑散な駅であった。

「ホームに出てみませんか。涼しいですよ。」と陳さんが誘ってくれたが、車内でも涼しいので遠慮した。「それでは」と言って彼は出て行った。西安から乗車し、目的地は同じく成都である。水力発電関係の会議に出る技術者で、歳のころ四十半ば、丸顔に黒縁の眼鏡、小肥りで、温厚な人であった。

夜が明けると、窓外の景観は一変していて、四川盆地には緑の水田が一面に展開していた。刈取り後の田圃はわびしいが、夏の水田は気持がよい。時には小川が車窓を流れ、穏やかな朝日の中に、農夫の姿も二・三見える。朝露で彼らの足は濡れているに違いない。

車内は洗面や朝食やらで次第に活気づいて来た。洗面所で様子を看ていると、日本人の洗い方とは違う。タオルを先ず濡らして石鹼をつけ、顔に当てて顔の方をぐるぐる動かしている。私は日本流に洗面したが、誰も妙な顔をしなかった。洗面にまで“自由化”が進んだらしい。服務員が来て朝食の予約をとり、現金と引き換えに切符を渡して行く。しばらくすると、運搬車がアルミの弁当箱を満載し、ガラガラと音を立てながらやって来る。切符と引き換えに食べる

仕組みになっていた。中身は“ごはん”又は“うどん”に肉や野菜の切れ端が入れてある。美味しそうには見えなかった。食堂車を利用する人たちもいた。私はもっぱらそこへ通った。

終着駅に近づいたせいか、周囲の話し声にも弾みが出て来た。ところが、厄介な事件が発生したのである。成都の手前四つ目の田舎駅（新興場駅）で列車が動かなくなってしまった。半時間過ぎても発車しない。車内放送も何一つとしてない。

伝染病発生のニュースが“口こみ”で流れて来た。患者は香港からの観光客で、天然痘らしい、車内消毒をするのだという。その上、悪いことには、我々を置き去りにして、機関車までが発車してしまったとも言っている。ほんとかなと思って通路側の窓から首を出して看る。なるほど機関車の姿が無い。仰ぐと空は晴れわたり、今日も暑そうである。

フランス旅行団が独占した軟臥車（特別寝台車）の窓からも二・三人が顔を出している。昼過ぎに彼らを迎えに中型バスが一台、列車近くの空地に停った。しばらくして、手荷物を提げ、額に汗し、線路沿いに歩く一団が見えた。その中には昨夜食堂車で酩酊し、愛嬌を振りまいていた豊満な年増の後姿もあった。村の子どもが二・三十名、ぞろぞろ後に跟いて行く。民警がしきりに「走！走！」と叫んでも、一向に立去る気配が無い。彼らフランスの男女は子どもの好奇心を大いに刺激したらしい。

夏の日が沈み、また夜になって、皆は“没法子”（仕方がない）と寝てしまった。長い一日であった。何時間、寝ただろうか、列車の動き出す音で目が覚めた。午前三時を少し過ぎている。半日以上も停車していたことになる。その原因はどうやら機関車の配車に手間どったらしい。中国では機関車数と客車のバランスがとれているのだろうか。絶対数はあるにしても、余裕が無いか又は配車の方法がまずいのか、そのいずれかであろう。貨車は我々を追い越して次々に通過して行った。中国では旅客より貨物輸送の方が重視されている。

「成都は何処に行くのですか。」と陳さんが手荷物を整理しながら尋ねた。窓外にはまだ夜の闇が残っていた。「艾蕪先生のお宅を訪ねます。」「どこか分かりますか。」「いいえ。でも、作家協会へ行けば分かると思いますよ。」「その場所は？」知らないと答えると、自分が捜してあげる、成都には二回来たことがあるからと言う。会議に間に合わなくなったらと心配すると、始まるのは八時半だから大丈夫とまで言ってくれる。それでは気の毒だと言うと、“旅は道連れ”だからと微笑する。

宝鶏駅で別れて下車したＳ氏夫妻も親切な人たちであった。Ｓ氏は長大工学部で二年間の研究を畢え、四月に帰国していた。私の研究室にもよく顔を出した。彼が住む宝鶏市は未開放都市だから、Ｓ氏に西安へ出て来てもらった。夫人と一緒にホームまで出迎えてくれた。元気そうで少し肥えたように見える。夫人とは初対面であった。Ｓ氏が在崎中、“内助の功”を自慢していただけあって、しっかりして優しい女性のように見受けられた。翌日は朝から皆で観光バスに乗り、秦始皇帝陵・秦始皇兵馬俑博物館・華清池・半坡遺趾・陝西省博物館(碑林がある）を見学した。所要時間約七時間、バス代一人当たり三元半であった。驪山の麓、華清池では温泉に入ったり、西安事変当時、蔣介石がいた部屋やその壁の弾痕を見たりした。次の日は大雁塔へも行った。楽しい日々であった。Ｓ氏夫妻とは何時また会えるだろうか。

陳さんは腹ごしらえにと又、パンをゴソゴソ取出して勧めてくれる。車内燈の下でパンを噛り、冷えた残り茶を空き腹に流しこんだ。それでも、確実に成都に近づいているのだと思って、無性に嬉しかった。

14日の早朝五時、成都西駅に到着した。13日十時半着のが二十時間あまり延着したのであった。窓外はまだ薄暗いが、物の形を見分けられる明るさがあった。ホームは見当らず、引込線には数輛連結の有蓋貨車の黒い列があった。乗客はさっさと下車してしまい、服務員が出入口のドアに次々に鍵をかけてしまった。その行動があまりにも機敏で、私たちは取残され、窓から飛び降りる破目になった。近くの通路にも一人の女が四個の手荷物を前にし、途方に暮れて立っている。陳さんと二人で運んであげることにした。人助けは気分がよい。

陳さんは窓にぶら下がり、足場を確かめてから飛び降りた。上から荷物を次次に吊り下げ、下から陳さんが受取った。女は白い中ヒールを先に落として車体にぶら下がる。一瞬、締まった腰が宙に浮く。私は彼女のひんやりした両手首をつかまえ、陳さんは棒立ちになり、両手を大きく広げて身構えた。地上に無事、降り立った彼女は照れたように微笑した。歳のころ、三十歳前後で、均整のとれた体つきをしている。

女の重いトランクを提げ、待合室の入口に辿り着くと、陳さんと彼女は私を待っていた。彼女は小走りに駆け寄って来て、こくりと頭を下げ、にっこり笑って“謝，謝”と言った。ぱっちりした眼で、歯並びも綺麗だった。それにふっくらした大柄な丸顔は“西安美人”の特徴を具えている。「こけし人形」の顔のようだ。

私たちは彼女と別れ、バス停の方へ歩いて行った。もうバスが広い道路を動

いている。ビルも立並んでいるが、上海と違って、いかにも古都という感じである。バスを待つ間に、身分を陳さんに明かす必要を感じた。艾蕪先生宅に着けば、日本人だと分かるに違いないと考えたからだ。「艾蕪覚え書」と題した“紀要”所載の拙論の抜刷りをバッグから取出して見せると、拾い読みした陳さんの表情には別に変化もなく、その後の行動にも変化は見られなかった。

出勤時のバスは混雑していた。八車線もあるような大通りを自転車が次々に滑るように走って行く。ところが幸いなことに、「成都市文化局」と大きな看板を下げたビルがふと目に飛びこんで来た。私は陳さんを促がして、次のバス停で下車した。そこへ行けば作家協会の所在が分かると判断したからだ。百米ほど後戻ると、陳さんは「さっきのを一寸、貸して下さい。それを持って行くと話がしやすい。」と抜刷を手にし、文化局の通用門の方へ道路を横切って行った。その時、遠ざかる陳さんの後姿が急に大きくなったように感じた。五分も待っていると、右手を高く挙げて手招きする陳さんの姿が見えた。通用門には三輪タクシーが来てお客を降ろしている。よいタイミングだった。私も広い通りを小走りに横切った。急いでそのタクシーに乗込むと、すぐに発車した。

中国のタクシーは爆発音を朝の街に響かせ、振動しながら走った。二人乗りで、一見、日本の三輪軽トラックを改造したような車体をしている。上海や福州にも車体を濃緑色に塗ったこんなタクシーがあった。料金は格安、外賓用の四分の一で同じ距離を走る。

艾蕪先生の自宅は作家協会のすぐ裏通りに在った。門前で陳さんは私と別れ、同じタクシーで会場へ行くと言う。私は最敬礼をした。陳さんの顔にも微笑が浮かんでいた。私の腕時計はもう八時近くを指している。間に合えばよいがと思った。

3 艾蕪先生との単独インタビュー

1982年8月14日、午前9時から約1時間半、艾蕪先生の自宅で単独インタビューを持つことができた。以下は艾蕪先生と筆者との問答の記録である。

問： 最近の中国の小説について、先生のご意見・ご感想をお尋ねしたいのですが――

答：現在、中国の文学はこんな具合になっています。つまり、1979年、第4回の“文芸工作代表者会議”を境にして大きな変化が生じました。どう変ったかというと、作者の題材・書き方に対して無理に干渉すべからずということで

す。“四人組”のようなやり方は一掃されました。“四人組”はこう書け、そうは書くなと言っていたのです。“文芸工作代表者会議”では作家が書くことに無理に干渉しないで、作家各自に責任を持たせることが確認されました。これこそ現代中国文学に生じた大きな働らきです。

第二点は昨年、“思想戦線座談会”というものがありましたが、そこで文学評論の正常化について議論されました。つまり、文芸の評論は周囲から攻めたててもいけないし、政治運動になってもいけないということです。比喩的な言い方で言うと、棍棒で毆りつけてもいけないし、帽子をかぶらせてもいけないし、辮髪をつかまえてもいけないというわけです。元来、批評は人のために好かれということでされるものです。このような考え方が明確になりました。私は政府もそうするのがよいと考えています。

文化大革命の時、“四人組”は文学批評をどのようにしたかといいますと、法廷で裁くように作家たちにどんな作品を書いたのか、それでは罪を犯かしたことになるのだと決めつけました。

従って、文芸界には二つの重大なことが発生しました。一つは何を書くか、どう書いたら干渉されないかと作家たちが考えたことです。二つは批評ですが、人のために好かれと思ってするのであって、政治運動にしてはいけないということです。

それで、今年には一つの重要な思潮が起こって、中国の新しい文学が勢よく発展し始めました。“四人組”が打倒されてから現在まで、新文学は大きく発展し、短篇・中篇・長篇の小説はこの四・五年のうちにその作品数が莫大な数になりました。

問： 白樺の《苦恋》について先生のご感想をお尋ねしたいのですが——

答：中国の現実について言いますと、“四人組”が打倒されてからは、全国がのびのびと発展して来ました。それは主として、人々が解放されたということです。彼はしかし、少数の人々に起こった悲劇を書いたのです。極めて稀な情況を作品に書きました。“四人組”が打倒されて、多くの人々が救われたのに、彼はそうではないと言っているのです。更にまたストーリーにわざとらしい点が多くあります。文学は真実が求められるのに彼のはわざとらしいのです。というのは、漁夫の娘がアメリカに行き、ある会社の売子になりますが、着ている服がボロであるとか交際する人がいなかったとか書いていますが、アメリカの会社には社員が大勢いるし、ボロ服というのもアメリカの実

状には合致していません。

しかし、この作品の処理の仕方はよかったと思います。つまり、一篇の文章が一篇の文章を批判しただけだったからです。もし、“四人組”が健在でしたら、全国の新聞が批判し、すべての出版物が批判したはずです。しかし、そのようにはならなかった。過去の批判はすべて、人民日報や光明日報が批判しましたが、彼はただ二名の人の名前で批判されただけでした。もし、《文芸報》が批判していてもいけないのです。それは中国のすべての文学芸術界を代表しているからです。二名が批判したのは二名だけによる批判に過ぎませんが、《文芸報》の編輯部が批判したとなると、全文芸界が彼を批判したことになります。従って、今回の白樺への批判は正常なものであったわけです。つまり、二名が意見を発表したのであって、それは全国の文学芸術界を代表したものではありません。それで、今度の処置は周囲から攻めたてたことにはなりません。“四人組”がつくりあげた文芸界の悪い結果は非常にひどいものでした。ある文章が気に入らないと、全国の新聞に批判させたものでした。

問：　作家はなぜ立上がって“四人組”を攻撃しなかったのでしょうか。

答：それはこういうことです。陰険な圧力や政治力で圧迫を加えたので、作家たちの中には憤死した人もいました。腹が立っても言えないで、皆は口を塞ぎました。彼らの面前では恐ろしくて言えないのです。“お前は問違っているぞ”。と言われると、“ごもっともで——”と答えるような場合もあったのです。そうさせたのは芸術上の空気ではなくて、政治が人を全く圧迫したのでした。だから、老舎は自殺してしまったのです。

問：　“四人組”の復活は考えられないでしょうか。

答：私たちは歴史の教訓から、全国の人々が皆、注意するようになりました。今、書かれている文学作品の中には、“四人組”時代の悪い現象が反映されています。人々は今更、四人組の悪行に驚いています。再びあのようなことが起こってはいけないと思っています。そのようなことは再び起こってはいけないし、人々は皆、きっと起らないようにと警戒しています。皆が今、求めているのは社会主義の民主社会主義の法治であり、社会の民主化です。“四人組”の過去の時代には法治は無かったのです。憲法はかれらに踏みにじられてしまいました。それで、今日では憲法を尊重し、法治を要求し、そして社会主義の民主化を求めているわけです。

問：　農村には依然として封建思想があるようですし、一般的には民主化はまだ不充分のように考えられますが——

答：中国には農民が多いのです。しかし、彼らは今、自主権を持っています。昔、“四人組”の時代には自主権がありませんでした。農民に命じたものを作らせ、農民の作りたいものを許さなかったのです。農民は作るのが恐ろしかったのです。ところが、趙紫陽が四川にいた時には、農民には自主権があり、作りたいものを作りました。生産も順調でした。すきなものを作ったからです。農民の自主権は拡大されて、経済上でも自主的になりました。だから、今では農村は豊かになっています。“四人組”の時代には瓜を作ろうとすると、瓜はだめだ、わしらのために林檎を作れというので、農民はそうしたのです。趙紫陽は四川で農民の自主権を拡大して、経済上でも彼らに民主を与えようとしました。一方、工場の方はやはりこの自主権があります。“四人組”の時代には工場の中には自主権がありませんでした。今では、“工人委員会”があって、工場内のことは多くのことを委員会が決めてよいことになっています。農民と労働者とは経済上で先ず自主権を得たのです。これは民主の基礎だからです。

問：　政治上の民主はどうなっているのでしょうか。

答：今はこうなっています。“県長”を選挙する場合、どんな人物を選ぶかといいますと、政治上どのような人が必要なのかを考えて、自分で選ぶ権利があります。昔、“人民代表会”がありましたが、今でも代表を選ぶ権利を人々は持っています。しかし、経済上の自主権が先ずあってこそ、政治上の自主権も生まれて来ます。

解放前、国民党は誰彼となく逮捕していました。金持ちは目こぼれにあづかりましたが、貧乏人は捕えられて兵士になりました。現在では、徴兵制度は一定の年齢になると、自分で兵士になりたければ自分で申請をします。今は待遇がよいので、解放軍の兵士になりたい人々がいるわけです。解放軍から除隊すると先ず軍での職務が考慮されて、必ず仕事が分配されます。

問：　解放後は確かによくなりましたが、それでも一つの社会現象は一般的に善と悪との両面があります。中国社会の社会現象で、悪の面にはどういうものがありますか。

答：確かにその通りです。良い原因、悪い原因はそれぞれどこにあるのかを検

討すべきです。よい現象には必ず困難な闘争がつきものになっています。そしてその苦しい闘争はよい面を生み出します。社会現象の分析ではどちらの方が主要なものであるのかがよく問題となります。現在ではよい面の方が主となっています。悪い面は次第に減少しつつあります。私たちは新聞紙上に搾取したり汚職したりする人や盗賊まがいの人のニュースを見ますが、人人は皆、憤慨し、そのような人物を排除しようとしています。

問：　街頭に標語が多いように感じますが、いかがでしょうか。

答：それはこういうことです。新しい気風は“実事求是”です。それでやっていけば、無駄な言葉は不必要です。標語で言っているのは、それが不充分だからこそ、そう言っているのです。仕事を実際にうまくやるには、実際の効果を考えてすべきです。その点、農民はどうかといいますと、責任制が採られていて、畑は自主権をもって耕作し、作りたいものは何でも植えます。しかし収穫に責任を持っているのです。だから、市場は一般的に発展し、買いたいものが買えます。“四人組”の時には、買いたい物があっても買えませんでした。実の無いスローガンを叫んでも、実際には生産があがりません。だから、工場では作業が渋滞することがあります。

問：　会議が多過ぎて、現場では困っていると聞いていますが——

答：確かに多いようです。不必要なものも多いようです。私たち中国の党中央もこの問題に注目するようになりました。つまり、会議の中には不必要なものもあるからです。高齢の科学者も会議に参加しますが、彼らは研究の仕事をしたいのです。会議が開かれると、四・五日または十日もかかります。

私は去年、北京での会議に四回出席することになっていましたが、実は二度だけしか行っていません。一度は北京から朝鮮へ行き、二度目は“思想戦線座談会”でした。これ以外に、作家協会の理事会がありましたが、休暇を願って、行きませんでした。今年は北京へ一度行き、会が終ると、廬山へ行きました。帰って来たばかりで、また会議があります。会議はかなり多いです。だから旅館も窮屈になるのは会議の多いせいでもあるのです。今では出来るだけ不必要な会議は減らす方向に進んでいます。

問：　雲南へ行かれたそうですが、昔と大分違っていたことでしょう。そのあたりのことを——

答：中国の社員（人民公社の社員）はラングーンへ旅行できますし、ビルマからも瑞麗・隴川（雲南西南境の地名）へ来ます。彼らは商品をたくさん持って売りに来ます。そのような物売りは許可しています。国境近くの人々は“辺民証”があれば、ビルマ側へ行けるし、ビルマの人々は自由にこちらに来ます。私は隴川へ行きタイ族の家を訪問しましたが、彼らの幾人かが少し前にラングーンまで行って来たと言いました。タイ族は招待されて昆明へ旅行しますが、一般の農民は自費です。今では、雲南のあの地方の農民の生活はうまくいっています。昔、“四人組”の時代には、稲だけ作り、別のものは許可されませんでした。今は、色々なものを作っています。彼らは甘蔗を作ると、一畝（6,667アール）当り、四百元の収入があります。だから、農民はみな豊かになりました。タイ族が私に見せてくれましたが、ラジオや録音機を持っていましたし、テレビを持っている人もいました。これは農民に自主権があって、甘蔗を作ることができたからです。昔は稲だけで、別のものは作れませんでした。食糧が不足すると思いこんでいたわけです。

問：　人民公社になって、農民が私有地を失くしたことについて、どうお考えでしょうか。

答：合作社の生産隊が成立して、いくつかの問題をやはり解決しました。というのは、農民は畑を分配されましたが、農具やその他、何もありませんでした。どうして耕作できましょうか。彼らは合作社に頼みこんで、それが解決されました。しかし、共同作業には一つの問題が発生しました。つまり、農民の自主性が減少してしまったということです。生産にあまり努力しなくなりました。だから、今では責任制を導入しています。彼らは自分たちの作ったものに責任を負い、多くが彼ら自身のものになるようにしています。当然、各地の情況には違いがありますが——。以前の生産はあなた委かせのドンブリ勘定で、努力してもしなくてもよかったのです。それで、努力しなくなりました。多く働いても収入が増えないからです。それで問題になったのです。しかし現在では多く働けば収入も多くなり、社会主義の原則に合致しています。社会主義の民主には先ず労働者・農民が生産面で彼らの自主権を持ち、その自主権を拡大しなければなりません。

問：　中国では子どもは一人だけ生むことが叫ばれていますが、この点について——

答：子どもを一人だけ生むことは、負担を少なくします。当然、中国には“多子多福”という思想が昔はありました。この思想は長期にわたって存在していました。私には外甥が一人いますが、子どもが四・五名もいたら、その負担を彼は背負い切れないのです。それで、彼は今では子どもは少ない方がよい、一人の男の子を生んでよかったと満足しています。もし、女の子を生んでいたら、彼は心中、いささかがっかりしたことでしょう。当然このような考え方はこれまで長期にわたって存在した男尊女卑の思想です。農民にもこの考え方がありました。目下、この政策が推進されているので、農民は先ず一人の子どもを生めば、彼の負担が減少することになります。解放前の社会では、農村には医薬品が無く、農民は子どもをたくさん生みましたが、死亡した子どもも多かったのです。解放後は医薬品や衛生面に注意しました。それで、農民の子どもはみな大きく成長することができました。従って、この点も人口が増加した原因の一つです。農民が豊かになれないのは子どもが多すぎるからです。それで、今はできるだけ子どもを少なくするようにさせています。今その宣伝を繰り広げています。人々は幹部が率先して子どもを一人生むことを求めています。この点も今、宣伝され、農民が子どもを一人生むことを喜ぶように宣伝を展開中です。

男の子が生まれると家庭では歓迎されます。子どもは一人でいいのです。家庭の負担が少なくてすむからです。しかし、女の子が生まれたら、心中、いささかがっかりすることでしょう。そして、もう一名、男の子が欲しいと考えるでしょう。それは無理からぬことでもあります。農民は子どもが少なくなったので負担が少なくなり、これはよいと感じているのです。中国ではこの“多子多福”・男尊女卑の思想はずっと存在しているので、私たちは今や、女性については一人の女性は一人の息子と同じだというように非常に尊重しています。

昔の女性はといいますと、家の中にいて街頭には出ませんでした。成都では解放前、街頭に女性を見かけることがありませんでした。女性が街に出るには「かご」に乗らねばならないことになっていたので、「かご」が呼ばれたものでした。外からは中にどんな人が乗っているのか分かりませんでした。

今ではすべての女性が街に出て来ます。つまり、男女平等です。昔は映画を観る時でも、仕切りがしてあって、男女別々に腰かけていましたが、今では違います。切符さえ持っていれば、混じり合っても腰かけられます。私たち高齢者からみれば、社会の大きな変化です。昔は成都では女性の姿が目につ

かなかった。「かご」に乗って街へ出て行くからです。特に南の方の女性は昔このようでした。

私の母はといいますと、脚は纏足で小さな足でしたし、祖母もそうでした。今の世代は、小さな足の人はいなくなりました。これは女性に対する大きな解放です。年寄りの中にはまだ纏足の人がいますが、それは女性にはむごたらしいことですから、今の女性は徹底して纏足はしなくなりました。女性は外へ出るようになり、家の中に引込んではいません。だから女性で教師や医師になっている人が非常に多くなりました。農村でも女性は重要な労働力です。私にも娘がいますが、次女は成都医院の医師をしています。

問：　中国の女性は一般的に性格が強いようですが、その原因はどこにあるのでしょうか。

答：封建社会では女性はひどく圧迫されたものでした。五四運動は女性の社会にも思想を解放しました。北伐の時にも、女性は兵士となって従軍しました。女性の権利は尊重されなければなりません。五四運動の時期には二つの目標がありました。一つは民主革命を実現することであり、もう一つは科学的であることを求めました。そしてすべての民族の男女平等を実現しようとしました。男女は自由であり、自由な恋愛をすべきだというのが五四運動の思潮でした。当時、郭沫若や魯迅はいずれも旧社会に反対しました。私も旧社会に反対しました。女性の中にも旧社会に反対した人たちがいました。男女は必ず平等で、自由変愛をし、男女の社会は自由でなければならないというのが、五四の思想であり、思潮でもありました。そういうわけですから、革命に参加した女性も多くいました。私の妻も湖南省で党の学校に入ったことがあります。それは共産党が運営していた学校で、革命教育をする学校でした。

残念ながらここまででテープが切れた。録音の再生には、四川方言の聴取し難い言葉もいくつかあったので、長大の中国政府派遣留学生、徐新非君の協力を得た。謝意を表したい。

意　外

張と李は自分の田畑は少しも持たぬ貧乏百姓で、日頃は他人の畑仕事を手伝って、どうやら日を過ごしていた。農閑期になって雇い主が無くなると、張は門前で日向ぼっこをし、服やシャツを脱いでは虱取りをするか、刃物を持って柴刈りや焚き草をとりに山へ行った。ところが李はそうはしなかった。彼には彼なりの考えがあった。元手を借りて広東くだりまで塩の行商に行くことだった。若き男子たるもの遠く郷関を出でずんば、運に巡りあること能はずと考えていたのだ。しかし張は猛反対で、人間の一生はそれに見合った米しか与えられていない、遠くへ行っても一粒の米さえ増えるはずはないと言いはった。彼自身、定められた飯を食べることを考えているだけであった。

しかし、銭は人間の眼の色を一番変えさせるものだ。李が塩を何回か売って、借金を返済し、手許にパリとした紙幣が残るのを見ると、張は大いに心が動揺した。お前は家に籠って虱をたくさん取ればいいのさと李は彼を嘲笑した。張は溜息をついて

「雇い主が無いし、空き腹じぁなぁ。」

李は笑って

「お前の体にはすぐ食べられる食糧があるじぁないか。捕えて食べなよ。」

張はちょっと罵り、早速、元手を借りて籠と天秤棒とを買入れた。しかし、いざ出かけるとなると、張は何となく気が進まず、しきりにぼやいた。

「戦争が無けれぁ、いいがなあ。」

李は軽蔑して尋ねた。

「なぜいいんだ、戦争が無けれぁ。」

「第一、お前が安心して外で商いができるし、日本の飛行機に逃げ隠れせんでええからさ。」

李は冷笑して

「馬鹿！　いいか、戦争はいい儲けになるんだ。いつもなら二十銭で仕入れて二十五銭で売ってさ、儲けは知れたもんだ。」

張はなるほどと思って、やはり出かける決心がついた。

李はまた彼を馬鹿にした笑いを浮かべた。

「やっぱり、行くのはやめとけ。爆弾がドカンときても、わしは知らんぞ。」

湖南から広東へは、途中に高い山があり、林が多かった。土匪が出ないと分かっていても、道連れが少ないと、内心、どうも恐ろしかった。だから、李は

慎重に思案した。用心のため、銭は二ヶ所に分散して持つのが一番よい、一つは服の縫い目に入れこみ、一つはズボンのベルトに隠しこむようにしようと、出発間際に張にそう言いふくめた。面倒だ、道中、銭の心配をし、土匪にはビクビクするとは嫌なことだと張はそう思って、思わず溜息をついて言った。

「道中がそんなに物騒だと分かっとったら、無理して来るんじぁなかったなあ。」

李は張を怒鳴りつけた。

「お前、帰れ！　銭がそう楽に稼げるとでも思ってるんか。俺様は一人で行って、歩き廻るさ。」

張はガンとやられて、しぶしぶ歩いて行くより仕方がなかった。

その時、彼らは窪みが続くところを、丁度歩いていた。朝霧はまだ消えず、少し離れたところでも、樹木の茂みがはっきりとは見えなかった。山の泉だけが人知れずどこかに流れ、彼らの足音につれて、サラサラ音を立てていた。

足許が次第に高くなって、道は高原へと延び、周囲の霧は自然と薄くなり、散ってしまって、暑い日射しが雲間から射して来た。樹木は少なくて、一面に新緑の灌木が茂っている。その間に、ピンクや白の野花がまじっている。道の両側には“黄雞姿草”がたくさんあって、芳香を放っていた。二人はそれを手当り次第に引抜き、頭に巻きつけ、帽子代わりの日除けにした。遥か下の方はずっと見渡す限り青々とした田畑が広がっている。稲の苗や甘蔗や落花生がこの五月には成育する時期である。とっぽ笠をかぶった男や藍色の頭巾で顔を包んだ女が田の中で何かを撒いている。風に、白い粉末が霧のように巻きあがった。彼ら二人にはそれが何であるのかよく分かっていた。石灰を撒いているのだ。張は思わず感動して言った。

「多くは要らん。こんな田地が十畝もあればなあ。お前と稼ぎに出るなぞ考えもしねえのに。」

彼が日頃、喜んでするのはズボンの裾を太腿までまくり上げ、牛の尻から怒鳴りつけて田を鋤くことであった。又は両手の掌に唾をパッとかけ、鍬の柄を握りしめ、地中深く力まかせに打ち込むことであった。一番嬉しいのは小さな種子が黄黒い泥の中に播かれて、二日も経たないうちに緑の芽を出すのを目にすることであった。しかし、李は少しも興味を示さず、道を一心に急ぎ、張を急がせた。

「早く歩け！　今晩、宿に着かれんで、夜道でもしたら、どうなるか分からんぞ。」

高原地帯を越えると、道は曲って山の中に入った。作付けされた畑や瓦屋根が寄り合った村落は道中にもう見られず、前も後も青々した樅の樹が見えるだけである。太陽は時として雲間に隠れ、時として現われた。だから山林は明るくなったり暗くなったりした。風が無いと物音一つ無く、山道を踏みしめる自分の足音だけが聞こえた。風が出ると、海鳴りのような音が何処からか響いて来て、その勢いにはいささかぞっとなった。張は思わず怯えて尋ねた。

「連州までには、何日かかるんかな。」

「どうしたって、まだ四・五日はかかるさ。」

「ずっとこんなふうかね。」

「これより険しいところがまだまだ多いぞ。」

張は黙り込み、吐息をつくばかりであった。しばらく歩いて又、尋ねた。

「おい、銭を奪られたら、あんたどうする。」

李はうるさい奴だと思って、

「お前は道を歩けばいいんだ。どうしてそんなことを考えるんだ。」

張は悔んで言った。

「あんたは俺の辛さが分からん。俺はあんたとは違うんだ。銭を失くしても、あんたはまた稼げるだろうが、俺は日干し、その上、借金取りから責めたてられるんだ。」

李は彼を別に慰めようともせず、かえって責めて言った。

「フン、そんなこと大したことじゃねえ。銭が奪られたら、わしは軍隊に入るさ。ご先祖様の恥にならなけれぁ、何をしてもいいさ。はっきり言えぁ、お前に肝玉さえあれば、この世で腹を空かすことなんかねえんだ。」

張は黙り込み、うつむいて歩くだけであった。昼過ぎごろ、一つの岐れ道に到着した。そこには休息して涼をとる休想所があり、上の方は榕樹に蔽われ、後の方には山の泉がサラサラと流れていた。長途の人は皆そこに休んで汗を拭き、両手で水を掬いあげて飲むのである。張と李がそこに辿りつこうとしていた時、入口に上半身裸体で、手にそれぞれ銃を持った人が数名いるのが見えた。李は「しまった」と叫びつゞけ、張は向きを変えて逃げ出した。しかし、銃を持った男たちは目ざとく見つけ、さっと立上がって怒鳴った。

「逃げるな！　逃げたらぶっ放すぞ！」

同時に、銃の口桿を引く音がガァチャガチャ聞えた。李は慌てて、張を呼んだ。

「おい、なんで逃げるんだ。」

張は発射されそうな音を耳にして、すぐに立止まった。銃を下げた小男が彼ら

へ怒鳴った。

「何者だ！　こっちへ来い！」

李は歩いて近づきながら、注意深く応じた。

「わしらは貧乏人で、労働者です。」

小男は陰険な笑いを浮かべて

「いいから中に入れ！　担ぎ手が丁度要るんだ。」

張はびっくり仰天して、一言も出せず、李の後から休憩所の中に入った。中には大勢の人が坐っていたが、張は看るのが恐ろしく、心中、確かに慌てていたので、単に銭を出せというのか、命をとろうとしているのか、それが分からなかった。が、その小男は別にポケットを調べることはせず、尋ねただけだった。

「貴様は今年いくつだ。」

李が慌てて答えた。

「これは二十八です。」

小男は李の頭の先から爪先まで見下して尋ねた。

「貴様は？」

「私は一つ年下で、二十七です。」

小男は一人の男の方を振返って大声で言った。

「こいつらは二十七と二十八です。めくって調べてみて下さい。昨日逃げたあの二人はいくつだったか。」

石碑に寄りかかり坐っていた男が帳面をとり出してめくっていたが、考えこむようにして言った。

「宋生富は同じぐらいだが、朱流泗はまだ二十三だよ。」

小男は李の顔をしばらくしげしげと看てから言った。

「かまいません！　ケチをつける奴はいないでしょう。」

二人が話し合っていた時、石碑に寄りかかって坐っている男を看ると、軍服を着ているが穀つぶしの軍人であることが李にはすぐに分かった。また地面に坐って休憩中の人々を眺めると、なんと色とりどりの服を着ていて、善良そうで、いかにも百姓上がりらしく見えた。この人たちはどんな人なのだろうかと思った。小男はその軍人に報告してから張と李に向かい、猾るそうな笑顔で、慰めるように言った。

「わしらに跟いて来て荷物を担げ、銭は出す。その日払いだ。」

張はその言葉にほっとなった。ポケットを捜したりしなければ、何をさせられても、してやろう、担ぎ賃まで出してくれるとはもっけの幸いだと思った。そ

れでも李は疑い深く、何回もそっと彼らを注視した。

しばらくして、石碑に寄りかかっていた軍服の男が腕時計をチラリと看て言った。

「時間だ！　出発だ！」

呼子をピーッと吹くと、皆ぞろぞろ立上がり、休憩所から出て整列した。小男は軍服を着ながら遅い者を叱りつけて、

「はやくせんか！　ぐずが！」

外の榕樹の下の辺には何人かが別にいて、内の者と合流して約四五十名が二列縦隊で歩いた。彼らはみんなふだん着で、銃を持っていなかった。銃を持った別の十名あまりが、その時は皆、軍服姿になっていたが、ある者は前の方を、ある者は隊伍の後の方を歩いた。小男は張と李とをちょっと看て、くすくす笑って言った。

「わしらと一緒だったら、きっといい目に遇うぞ。」

それから腕時計をはめた男へご機嫌をとるように言った。

「これで充分であります。今日は実にめでたし、めでたしで。」

張と李は布団包みを分けて担ぎ、行李を担いでいる二人の男の後に跟いて行った。彼らは荷物が少ないので、歩きながら気晴らしの話をする余裕があった。李はシャツを着た方の担ぎ手にそっと尋ねた。

「お尋ねしますが、あの人たちは何する人ですか。」

彼は咎めるように言った。

「お前、間抜けだなあ、見た通りの兵隊だよ。分からなかったのか。」

李は半信半疑で尋ねた。

「兵隊だったら、どうしてふだん着の人があんなに多いので。」

「フン。それが分からんかなあ。よく看てみろ。あいつらは兵隊にとられたばっかしの若僧だ。」

その時になって、李は初めて心から安堵した。シャツの男は話しかけにくいと思ったので、李はしばらく歩いてから、今度は継ぎ剝ぎの軍服を着た担ぎ手の方に尋ねた。

「あなたがたも捕えられて来たんですか。」

「いや、わしらは炊事夫だ。」

彼の答え方はかなり穏やかだった。夜になって、彼ら四名の荷物運びは一緒に休んだ。張は横になっても寝つかれず、小さな声で尋ねた。

「あの兵隊たちは、何時わしらを帰してくれるんですか。」

シャツの炊事夫がプーッと噴き出した。継ぎ剝ぎの軍服のが言った。

「安心してわしらと一緒にいるんだな。あれこれつまらんことを考えるなよ。」

李は気になって尋ねた。

「どうしても、わしらを放さないのかなあ。」

シャツの男が咎めて言った。

「馬鹿め、お前らは。このざまが分からんのか。いいか、荷物担ぎを止めさせるどころか、銃の口桿までも引かせるぞ。」

張は我慢ができず、やり切れなくて、溜息をついた。継ぎ剝ぎの軍服のが彼を慰めるように言った。

「何で溜息なんぞを。お前の家にぁ年寄りや女房子どもがいて、安心できねえのかい。」

張は首を振って言った。

「いや、わしら、そんな者はいねえ。」

「それぁいいじぁないか。」

継ぎ剝ぎ軍服のが羨ましそうな顔をして言った。

「近頃、独り者は怖いもの無しだろ。お前は運がいい。薛仁貴（唐代、農民出身の将軍）のようにでっかいことがやれるぞ。」

張はしばらくしてから、やっと口を開いた。

「こんなわしらはつまらぬことは、別に考えねえです。ただ小商いをまじめにしてえだけで。」

「何の商売をかい。」

「塩の行商です。」

李は張がそう答えるのをみて、ほんとのことをペラペラしゃべったらいかんと、彼の方へチラリと目配せした。継ぎ剝ぎ軍服の男はうなづいて言った。

「なるほど。担いでいた籠で、お前らが並の労働者じぁないぐらい分かっていたさ。」

シャツの男はもう背中を向けていたが、また寝返って来て、急に尋ねた。

「お前ら塩の商いの銭をいくら持ってるんだ。」

張は返事しないで、ただおどおどして李を視ていた。シャツの男は何かを思いついたような表情で、窓と入口の方をチラリと打眺め、小声で言った。

「銭があれぁ、うまくやれるぜ。銭を出しぁ、あいつらは放してくれる。お前らが承知なら、わしが請合ってやる。黄班長へ一言、言えぁ、それでええんだ。」

そして、窓の方をチラリと看て、声を殺して言った。

「昨日、逃げた二人がほんとに逃げたとでも思ってるんか。銃があるのに逃げ出せるかい。やっぱし銭のおかげさ。」

「そ、そうだったのか。」と継ぎ剝ぎの軍服の男がハッと思い当ったような表情になり、額をなでながら、嘆息して言った。「あゝ、近頃は何でも銭だ！」

シャツの男は張と李とをしばらく視つめていたが、警告して言った。

「お前ら、銭を出すんなら、この二日のうちの方がええぞ。大体、山の中は逃げ易いしな。もしお上に引渡されて員数に入ったらさ、羽根があっても、飛び出して逃げるのはむずかしいんだ。」

張は李の方を視つめてひどく不安そうに、頭を掻いていたが、李がいい思案をしてくれるのを待ち望んでいた。シャツの男が再び口を開いた。

「銭は多くなくても、ええ。十円か二十円あれぁ充分だ。」

張は李の体を手でこづき、小声で尋ねた。

「どうするつもりだよ。」

李は相変らず彼を無視していた。シャツの男は事情が少しのみこめたので、李をぐっと引張って言った。

「おい。何考えてんだ。今、わしが言った方法はどうなんだ。」

李は冷やかに答えた。

「いいにぁいいが、わしらは一文無しだ。」

シャツの男はきつい眼つきで、しばらく李を見据えていたが、嚇かして言った。

「お前ら、どうしても兵隊になるのか………ええさ。一ヶ月後にぁ、お前ら、前線に出ること間違い無しだ。」

李は反撥して言った。

「兵隊になれというならなるさ。大したことじぁねえ。わしら貧乏人はもともと怖えもん無しだ。怖えもんと言えぁ、空腹だけさ。」

継ぎ剝ぎ軍服のが思わずうなづいて言った。

「そうだ。その通り………眠ろう、ローソクも消えかかってるし、明日はまた行軍だ。」

シャツの男はゴロリと背を向け、あざけって言った。

「フン。何がその通りだ。……貴様、日本軍と戦ってみろ、一個中隊ぐらいすぐ全滅だぞ。」

継ぎ剝ぎの軍服の男が痛いところを衝かれて舌をペロリと出したので、張は思わずギクリとなった。李は引きつった顔になって言った。

「畜生！　死ぬ時にゃ、どんな死にざまでもいいさ。」

夜も更けた頃、張は李をそっと揺り動かして小声で言った。

「眠られん、心配で心配でなあ。わしは明日、帰りてえ。」

近くに寝ている二名の炊事夫が鼾をかいているのを李は耳を澄ませて確めてから、やっと張へ向かって言った。

「銭をあいつらに渡したら、お前、どうして借金返すんだ。」

張は深々と溜息をついた。李は彼をなだめて、

「やめろよ。村にいたって、お前を兵隊に引張るからなあ。」

張はしばらく考えていたが、

「村の連中は言わなかったか。独り息子は兵隊にとらねえと。わしら、二人とも独り息子だ。」

李は頭を振って言った。

「そいつぁ信用できねえ。唐村長はどんなことでも仕出かすぞ。お前を兵隊に出すぞと言ったら、断わる手だてがお前にはあるめえが。今日のことだってさ、お上が告示を出して、あいつがお前を捕えるとなれぁそうするんだ。」

張は悲しそうに眼を閉ぢた。

翌朝、点呼の時、宋生富が呼ばれる番になると、小男の黄班長がきつい顔をして、張に言った。

「お前が応えて、ハイと言うんだ。今後、宋生富の名が呼ばれたら、すぐお前が答えるんだ。ボサーッと馬鹿みたいに突立っとるな。」

朱流泗が呼ばれた時にも、李にもそう言いつけた。

午後には細長い平野の中にもう出ていた。青々とした田野が彼らの前に新たにまた出現した。道は川沿いで、川岸には水車が姿を見せ、絶えずギイーッと音を立てていた。夫婦らしい男女が車に乗って踏みながら、稲田に水を引入れている。遠くでは、石灰を撒いている。張は荷物をずっと担いで歩いていたが、羨ましがったり、溜息をついたりして、何かといえば、いつも独り言を言った。

「この辺の田は、よく出来るなあ。」

夕方になって、ある街に到着し、大休止となった。朝はまた点呼で、宋生富の番になったが、張はすっかり忘れていて、二回も呼ばれたが答えなかった。小男がやって来て彼にビンタを一発くらわせ、怒鳴り散らした。

「馬鹿！　何、聴いていたんだ！　能無しめが！　お前が宋生富だ！　忘れやがって。馬鹿たれ、穀つぶしが！」

続いてまた一発ビンタをとって怒鳴った。

「貴様、憶えたか、貴様は宋だ、宋生富だ！」
張はヒリヒリする顔をさすりながら、ひどく怯えて、途方に暮れていたが、小男がまた平手打ちをしようとしているのを見て、強いて恐縮したように答えた。
「わ、…わかり…わかりました。」
朱流泗の番が来た時、李は返事をした。が、声が小さくてはっきりしなかった。点呼をとった兵士はかっとすぐに目をむいて彼を看たが、気を沈めて尋ねた。
「どうして、そんなふうに答えるんだ。答えたくないのか。」
李は答えた。懸命に怒りを押えた声であった。
「古兵殿、答えたくねえんじぁねえ。兵隊になれというんならなりますだ。日本をやっつけろというんなら、やっつけますだ。わしはあいまいなこと言いたくねえんで。わしの姓は李、親も先祖も李で、わしは李長発と言うんで。他人の朱の姓とは一緒になれねえ。たとえ、おふくろが朱姓の家に嫁いでも、わしは朱の姓にぁなれねえんで。それに朱なんとかなんとかなって、とんでもねえことで。」
李は話せば話すほど、我慢し切れず、腹が立って来た。点呼をとった兵士はかっとなった。
「なぐれ！　この馬鹿を、今から言うこと聴かん。何が兵隊になる、日本をやっつけるだ！　上官に反抗する気か！」
背の低い黄班長が近づき、李をパッと蹴飛ばし、憎らしげに罵った。
「貴様、この野郎！　打殺してやる！」
その外、別の班長も駈けつけ、拳骨でなぐりつけて加勢した。
李は殴られてから、すぐ彼ら四人の担ぎ手の部屋に帰った。継ぎ剝ぎ軍服の男が彼を見て同情し、溜息をついて言った。
「どうしてよく考えてみなかったんだ。結果は分かり切っていたさ。卵を石にぶっつけるようなもんだ。」
李は口惜しそうに歯ぎしりして言った。
「わしに道理を言わせたっていいじゃねえか。」
シャツの男は気取った風に言った。
「兵隊になったら、道理など通用しねえんだ。服従第一だ！　誰も彼も道理を言ってみろ、朝から晩まで、ワアワアぺちぁくちゃで、何にもならんのだ。」
しばらくしてから、李はプンプンして言った。
「早く、そうと分かっとったら、銭、出しとった方がよかった。」
張は李のこの言葉を待ち望んでいたので、腰のベルトをすぐに外ずして、紙幣

を取出し、涙ぐみ、興奮して言った。

「そうだ！　早く出した方がよかったんだ！」

それからすぐに銭がシャツの男の方へまわされた。すると彼は口をへの字に曲げ、軽蔑したように、冷やかに言った。

「馬鹿だな。山の中では言う通りせずに、今は街の中だ。どうにもならんなあ。」

即座に手を横に振って、出て行ってしまった。継ぎ剝ぎの軍服を着た男は残念そうな様子をして言った。

「あゝ、そうだよ。残念ながら遅すぎたんだ。」

李はうつ向き、唇を咬んで、一声も出さない。張は紙幣をベルトの中にしまい込み、泣き出しそうな顔になって、フーッと大きな溜息をついた。

1940年７月、桂林

1982年10月于樟東書屋記

(昭和57年10月19日受理)